

## 【論文】『祇園祭と疫病』

—2019年新型コロナウイルス感染拡大への対応を中心に—

遠藤 由起

日本大学大学院総合社会情報研究科

### Japanese Gion Festival and epidemic

—responses to infection of coronavirus disease2019—

ENDO Yuki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

Since ancient times, Japanese festivals have been held for various purposes. In the early Heian era, epidemics caused by water pollution spread in Kyoto. People in Kyoto had “Goryoe” in Jyogan11[869]. This was because they believed in revengeful ghosts and curses. “Goryoe” has its roots in the Kyoto Gion Festival. There were many infections and natural calamities in Japan. Therefore, in Japanese festivals, like Kyoto Gion Festival, people prayed to protect themselves from evil, and to get or return to health.

In the coronavirus epidemic 2019[COVID-19], the present Japanese festivals and relation of community's people were requested to correspond. Japanese festivals and people linked into their festival and responded by canceling or reducing the scale of the management of the festival. Reducing or canceling the scale of the festivals carried through the festivals in this year to people concerned with festival. This paper takes up the correspondence with the contagious disease COVID-19 at Japanese Gion festivals held in this time, moreover, it considers the significance of Japanese festivals of today.

---

#### 1.はじめに

日本の各地では一年を通して様々な祭が開かれている。特に夏や秋には、古くから特定の目的で祭りが執り行われてきた。日本の風土には四季が大きく影響している。そのために夏の暑い時期には雨乞いや疫病退散、秋には収穫への感謝や五穀豊穡への祈願などを目的とする祭が多くみられる。またこれらの一年を通じた四季折々の祭りが、日本の共同体社会の生活に区切り目を与え、日常と非日常のリズムを生んできた。古来より日本における祭りは、地域共同体とそこに住む人々の生活とともにあり、人々の生に様々な活力と意味とを添えてきたのである。

2020年は、新型コロナウイルスという新たなウ

イルスによる地球規模での感染拡大（パンデミック）が生じたことで、全世界で前代未聞の非常事態を迎えている。人々の生活のあらゆる側面で、大幅な規制と対策が強いられている。祭礼やフェスティバル、そして各種イベントなど人が密集する行事は、感染防止の観点からほとんど一律的に中止や規模縮小での開催を余儀なくされている。数百年、あるいは千年以上という長い歴史にわたって続けられてきた祭祀儀礼の類でも例外ではない。多くの人々が集まることに一つの大きな意義が認められる都市祭礼は、これまでの開催方法とは打って変わって観客を極力集めないというやり方に、また参加者も少数に限って実施する方法に変えて執り行われた例が多い。あるいは、祭の種

類と趣旨から、人々が集まれない、接することができないという制限の中では祭自体の意義をなさないということ、苦渋の中で中止を決めた祭もあった。このような世界的な感染症の流行の影響で中止や規模縮小を余儀なくされるという事態は、日本における数百年以上ある祭の歴史でもあまり類をみない事態だといえよう。一方で、祭の長い歴史においては、中断をやむなくされることも、祭の開催の仕方に変更を加えてきた史実も少なからず認められる。現代では、文化資源としての祭が開催できるということは、平穏な社会の反映であるとも捉えられる。しかし、祇園祭はもともとその成立の歴史を紐解くと、京都という都市で疫病が流行した際、これを怨霊の仕業と考えて祟りを鎮める目的で行われた「御霊会」にその起源が求められる<sup>1</sup>ともいわれる。都市の祇園祭は、もともと疫病の蔓延など危機的な社会状況下で、安寧と日々の平穏を願う人々が神に対して祈りを捧げる行ないでもあった。

新型コロナウイルスの感染問題の影響を受けた2020年度の京都祇園祭は、観客を集める大々的な行事はいくつも中止され、大幅に方法を変更して実施された。地方の祇園祭の一つである福島県の田島祇園祭も、早い段階で規模縮小での祭開催が決定し、御神事を中心に執り行われた。同じく祇園祭の名を冠し、九州地方の古くからの祭でもある博多祇園山笠は、中止という決断を余儀なくされた。祇園祭のみならず、日本における夏の都市祭礼や祭の多くが、縮小や中止を余儀なくされた。

祭にかける共同体や、各地からの参加予定者たちの思いはどんなものであつたらうか。社会的な混乱や危機状況にあって、日本の祭はどのような意味を持つのであろうか、日本の祭にできることはどのようなことなのであろうか。特に疫病との関連が強いとされる祇園祭の成立とその歴史をたどり、日本における祭の意義を考察する。そして、新型コロナウイルスの感染流行禍における、2020年度祇園祭の開催の仕方と人々の関わり方について、フィールドワークなどの調査結果をもとに探る。最後に、どのような状況下でも人々が祭を求め続ける理由は何か、今後の日本における

祭のつながりの模索と新たなあり方についての考察を加える。

## 2. 祇園祭の成立と、疫病と祭の関係

本節では、日本における夏の都市祭礼である祇園祭の成立と疫病との関係を歴史的にみていく。

京都市で毎年7月に開催される京都祇園祭は、2009年にはユネスコ無形文化遺産にも登録された有名な都市祭礼の一つである。祭には毎年180万人が訪れる<sup>2</sup>といわれる。祭は山鉾巡行という観客が多数集まる行事を中心に、1か月にわたって様々な行事が続く。

この祭の起源は、平安時代の貞観11年(869年)に始まった「祇園御霊会」にその起源があるといわれる。この「御霊会」では当時の国の数である66本の鉾を神泉苑に遣わし、疫病退散を祈願したのがその由来とされる<sup>3</sup>。祇園祭はその後、牛頭天王須佐之男命を祭神として、日本の各地に広がりを見せた。現在では、長い間継承されてきた祭も、失なわれた祭もあるが、いずれにせよ祇園祭は疫病退散を祈願することを主な目的として、各地域で行なわれてきたものであった。

### 2.1 祇園祭の成立

平安京が整備されて京都の都市化が進むと、人口が集積し、梅雨から夏にかけて水の汚染による疫病が蔓延するようになった<sup>4</sup>。疫病の流行は、京都の人々を恐れさせた。人々はこの恐ろしい疫病の流行を、平安時代に横死した怨霊や、外国渡来の疫神の仕業と考えた<sup>5</sup>。そこで、怨霊や疫神を鎮めるために、神泉苑の公式行事でもある「御霊会」が営まれたのである。祭には疫病の蔓延という災いをもたらす怨霊や疫神を慰め、歌舞芸能を尽くし、神の心が和んだすきに送ってしまおうという意図が込められていた<sup>6</sup>。

その後、外国から渡来する神々が収斂された「牛頭天王須佐之男命」を祀る「祇園社」(祇園感神院)の社壇が造営された<sup>7</sup>。この祇園社が現在の八坂神社の前身である。「御霊会」でははっきりと怨霊を疫病の原因に定めていた。そしてその怨霊に対する畏怖や信仰が諸国に広がり、民間の習俗として、

恒常的な祭になっている<sup>8</sup>、とされる。祇園社と御霊会では、この牛頭天王須佐之男命を疫病除災神として祀っている。インドの土着信仰の対象であった牛頭天王はもと疫病を蔓延させる疫神であったが、疫病から人々を守ってくれる神へと転換を遂げた、という<sup>9</sup>。この牛頭天王はやがて須佐之男命と神仏習合する。脇田晴子は悪疫除災の神として広範にわたり人々の信仰厚い牛頭天王を、異国の神ではなく、日本神話の神須佐之男命として定着させる必要があった、としている<sup>10</sup>。

貞観の御霊会以後も、疫病の流行に伴って定期的に御霊会は度々行なわれた。疫病神となった怨霊を鎮め、世の中を平穏に保つことが、時の施政者に求められたのである。御霊会は民衆の生活を守るべきものの責任を問うという形で、社会が回路となって報復が図られ、この報復を慰撫するという点に特色があった<sup>11</sup>。

平安末期には神の乗った神輿が、人々の待つ「御旅所」に渡御（神幸）するようになった。これが「神輿渡御」と「御旅所」の成立である。鎌倉時代末期には、今日の「山鉾」の原型である「作り山」が神輿渡御に登場した<sup>12</sup>。それ以降、山鉾の数が増え、応仁の乱前には60基に上ったとされるが、応仁元年（1467年）の応仁の乱によって、祇園祭は33年間の中断を余儀なくされることになった。

しかし、人々の祈りを反映した都市の祭が、日本の歴史の舞台から消滅することはなかった。明応9年（1500年）には祇園祭が再興され、以後、山鉾はほとんど同じ町によって当時と同一の風流が継承されて、現在に至っている<sup>13</sup>。また、江戸時代には大火による被害、明治における寄町制度の廃止、第二次大戦後の激動期など<sup>14</sup>、京都祇園祭は数々の困難と危機に直面した。その度に、京都祇園祭は山鉾町と京都の人々の営為と努力そして熱意で再興され、継承され続けてきた。目に見えない恐怖と戦ってきた英知と経験は、祈りと人々の力が結集してはじめて成功できる祭の継承の中に蓄積されている<sup>15</sup>。それはまた、文化としての祇園祭を継承させる大きな力になってきたともいえよう。

## 2.2 疫病と祭の中の日本文化

次に、疫病と日本文化という視点から、祭と疫病の関係について論じる。

前節では、平安京が整備された京都という都市で、人口の密集と水の汚染による疫病の蔓延が、疫神を鎮めるための「御霊会」、のちの祇園祭を生んだ経緯を見てきた。また、祭はさまざまな社会状況の影響を受けて中止や開催の危機にあっても、何度も立ち上がって再興されてきたのであった。

人口の集まる都市部では、現代のように衛生状態も良くはなく、医学も未発達な時代には昔から疫病や感染症が蔓延しやすかった。そこで、日本人の間では災いは怨霊や疫神の仕業であるという観念が共有された。一方で、日本人の重要な価値観として「穢れ」という思想があげられる。日本人は古来より「穢れ」を忌み嫌ってきた<sup>16</sup>。「穢れ」のタブー視は、日本の祭の随所にもみられる。死につながる事々、例えば身内の不幸などは「穢れ」の一つであり、祭の禁忌とされて参加に制限が課された。もっとも、この「穢れ」にまつわる日本人の「不浄観」は、波平によると普遍的な不浄観と重なるところも多く<sup>17</sup>、むしろ厄災の説明として「穢れ」観を用いることで、日本人の信仰行為の背景にあるもの<sup>18</sup>を明確化できるとしている。

「穢れ」を忌み嫌う思想からは、「穢れ」すなわち「汚れ」を清めることが重要になり、汚れていないものを尊ぶという考え方に通じてくる。この「穢れ」は実は単に物理的な汚れではなく、「精神的な汚れ」を指す<sup>19</sup>ので、宗教的な「祓い」という行為によって穢れを取り除く必要がある。その「祓い」こそは、祭においては神輿で街を練り歩く神輿渡御である。神の遷った神輿で、街全体を祓うというのである。波平の理論に基づけば、厄災の原因となっている穢れを祭の行事で祓うことで、社会と人々に安寧秩序がもたらされるということになる。また大森重宣は、神とはすなわち「良心」であり、この「良心」がないと祭も危機管理もうまくはいかないと述べている<sup>20</sup>。そして一方で、信仰を超えたところにあるのも祭であり、それはコミュニティや人々の間の「信頼」ではない

か<sup>21</sup>としている。「穢れ」の観念は日本人と疫病との関わり方に大きく影響し、それが祭における日本文化についても重要な背景となっている。

宗教学者の島田裕巳は、長い日本の歴史で疫病が繰り返されてきたからこそ、日本人は神や仏を祀ってきた、としている<sup>22</sup>。多神教である日本ゆえに災厄をもたらす疫神をも祀るのであり、もし唯一絶対の創造神を信仰する文化であったならば、怨霊である疫神を祀ることはなかった<sup>23</sup>とする。このような日本の文化と信仰がなければ、疫病の流行に際しても疫神を鎮める祭の形式は成立しなかったと考えられるだろう。

山田孝子は、祭で一緒に何かをするというのは非常に日本的なこととしており<sup>24</sup>、また日本社会は集団で生きていくためにコミュニティを維持してきた<sup>25</sup>、とも述べている。そのような日本人の精神性は祭の仕方にも大きく表れている。また本郷と井沢は、「和を以て貴となす」という日本人特有の精神性が、感染症の爆発的な流行を抑えることに功を奏しているという<sup>26</sup>。日本社会では和の精神に象徴されるように集団性を重視する一方で、集団やコミュニティ内の規範をお互いに守りながら、生活していくことにも気を配ることが多いといえる。感染症の流行が未だ終息を見ない2020年9月の時点では、人が集まるようなところで「他人に感染症をうつさない」という考えから、日本人には「マスク」を着用する人が多いということであろうか。すべてがそうとは断言できないまでも、他国との比較において実際に「マスク」を着用する人が多く目立ち、マスクの品薄に対する騒動が起こったことももったもなことである。祭の中止や規模縮小あるいは自粛ムードの高まりといった祭に関する一連の対応には、祭とコミュニティを愛し、その維持と継承の熱意を持ち続けてきた人たちの、祭を通じた絆やつながりに対する新たな模索が見いだせる。

### 3. 祭に関する議論と歴史的過程にみる祭の意味

ここでは、日本における祭に関する議論と祭の目的、歴史的過程における祭の意味について論じ

ていく。

日本における祭については、江戸時代の本居宣長をはじめとして、多くの議論がなされてきた<sup>27</sup>。田中宣一<sup>28</sup>は、マツリゴトとは民俗学者の柳田國男が説いた「マツラウ」説＝神に「奉仕する」説と、折口信夫が説いた「タテマツル」説＝「神への食物の献上とそれに続く一連の事柄」説が有力であるとみている。柳田國男は、祭の本体を「籠る」こと、すなわち酒食をもって神をおもてなしする間、一同が御前に坐することであったと捉えている<sup>29</sup>。また柳田は祭から、観客・見物客が増えた都市の祭を「祭礼」であるとする<sup>30</sup>。

古代に稲作との深い関連性を持って形成された日本の祭祀儀礼は、現代社会においてはその意義を変えたり、失っているものも少なくない。一方で、現代における都市祭礼や農耕祭祀の多くが、新たな意味や目的をもって、維持・継承されている。例えば、京都という都で疫病蔓延の要因になっていると考えられた疫神を鎮める目的から始まった御霊会は、現代社会では世界的にも有名になった文化遺産、文化資本の一つとなった。神を慰め、疫病を収めていただくことを祈願して行なわれた芸能や山鉦の美しい装飾などは、今や祭を継承してきた地元の人々をはじめ、世界中から訪れる観客を魅了している。また現代社会においては、日本の祭はコミュニティの維持や再生に一役買っている、あるいは非日常のハレの日としての役割など古くて新しい意義と、個人にとっての意味付けとを更新しながら持続しているといえる。

日本の祭には、祇園祭のような都市祭礼にみられる疫病退散や健康への祈り、そして農村における農耕儀礼など豊作への祈りが込められ、随所にその形が残っている。桜井徳太郎は、今日の神輿の神幸に見られるように華麗な形態に変化する以前は極めて素朴厳粛であった<sup>31</sup>、としている。禁忌事項を頑なに守るのも、そのことで祈りが聞き届けられると人々の間で信じられてきたからであり、聖性という観点からみると祭に残る古い形を遵守するところには一つの大きな意味が残されている。小松和彦は、このような古い形に認められるような祭の信仰や祈願の表象は、実は神なき時

代といわれる現代の都市に住む人々にとって、神ありの祭を求めてやまない大きな理由になっている<sup>32</sup>と述べている。その点については、第5節で詳しく触れることとし、ここでは日本における祭が、歴史的な過程でどのような意味と役割を持ち、日本社会の中でいかなる意義を持ってきたのかを再検討する。祭の定義である「マツラウ」=奉仕する、「タテマツル」=食物と酒を神に献上し、参加者一同も同じ場所に坐し、また「直会」を通して、神人が共食し、恵みに感謝し、祈願するということが、歴史的に祭というものの中核にあり続けてきた。そしてその営みはコミュニティ、地域共同体の維持と強化に役立ち、一方で祭を通じた新たなつながりと絆を育み、人々の間にこれらをよくよみがえらせてきた<sup>33</sup>といわれる。また、現在のように便利で豊かではない時代に、神や信仰と生活は密着しており、非日常としてのハレの日の祭が人々の生活に区切りを生み出し<sup>34</sup>、役割転倒のコミュニタス状態を作り出してきた<sup>35</sup>。祭では食の奉納をした後に、穢れを祓う意味も込めて神人が共同してハレの食事をいただく。そのように一時的にも日常から離れて休息し、食の上での養生も伴うことは、農村社会では特に重要な行事であり、精神的にも健康を回復させる効果を持っていた<sup>36</sup>とされる。祭はまた、食や酒を通し、あるいは精神的な紐帯を通した人と人の間の、あるいは神と人との間の「コミュニケーションの場」<sup>37</sup>でもあった。現代社会ではインターネットやモバイルツールを用いて、人と人との間のヴァーチャルなコミュニケーションが容易になった。それらは物理的な距離は短くしたとはいっても、表面的なコミュニケーションの場しか作りえないとすれば、それは発達といえるだろうか。もっとも、表面的かどうかは判断の分かれるところであり、またヴァーチャルであるかどうかにかかわらず、コミュニケーションをとる人たち自身がよいコミュニケーションを成立させる意思があるかどうかこそが最も重要な点であろう。ともあれ、古来日本の祭には、自然とともに自分たちが存在することを共同体の人々が確認し、神に奉仕し、祈りを捧げることを目的にしてきた。また食や酒というお供え

によって、人と人や社会が身体性の伴ったコミュニケーションをとることを通して人と人、神と人の間のつながりを新たに作る、という祭の側面は、日常における人と人の間の信頼の醸成にも大きな貢献を果たしてきたといえよう。

複合的な文化としての祭には、一面では捉えきれない様々な側面と要素が認められる。加えて、祭の意義や役割自体も、時代や個人に合わせて変わってくる。他方で、世界でも普遍的な祭の役割と効果、あるいは日本の祭ならではの意義が認められるのも事実である。日本の祭や儀礼において、歴史的な過程を経てなお守られてきたのは、人々の祈りと願いに関する項目、要素が大きいといえよう。そして、そのような祭の根幹にある要素が人々の間で世代を超えて受け継がれていく中で、各時代の要請や個々人に沿って、新しい変容や意義を作り出しながら祭は持続されてきたといえるだろう。

#### 4. 祭における新型コロナウイルス感染拡大への対応

世界規模での感染大流行（パンデミック）を引き起こした新型コロナウイルス（COVID-19）は、中国の武漢から帰国した男性の2020年1月16日に出された感染報告<sup>38</sup>の一例目を皮切りに、日本国内でも感染拡大がみられた。2020年9月現在では、感染者数73,901例、死亡者1,412名と発表されている<sup>39</sup>。諸外国においても、アメリカ合衆国の631万人以上<sup>40</sup>を筆頭に、WHOの統計では28,040,853人<sup>41</sup>に上る感染者が確認されている。

いわゆる3密といわれる①「密閉空間」②「密集場所」③「密接場面」の条件がそろった場所やイベントは、仕事や伝統の行事であっても感染拡大防止のためにこれを回避して、生活を送ることが求められるようになった。世界中でパソコンとインターネットを通じた「テレワーク」や「リモート学習」が進められ、3密が避けられない行事や業種の営業は、中止や自粛、規模縮小による開催といった規制を敷かれた。日本では感染対策として身体的距離を確保し、マスク着用、手洗いを実施する、あるいはオンラインやインターネット

を活用したり時差出勤を促すといった「新しい生活様式」<sup>42</sup>が提示された。

このように世界中が新たなウイルス感染症の大流行に対する困難な対応を迫られる中、日本における様々な行事やイベントの開催についても、かつてないほどの大幅な変更や見直しを余儀なくされた。本節では、2020年度の京都祇園祭における現地調査と、2020年度の田島祇園祭において行なったフィールド調査により、新型コロナウイルスの感染拡大防止に向けての現状と対応を論じる。

#### 4.1 京都祇園祭における対応

京都市で毎年開かれる京都祇園祭においても、今年の新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、6月には規模を縮小しての開催が決定した。祭は八坂神社でのご神事を中心に執り行われ、多数の観客や観光客を集めるような「神輿渡御」や「山鉦巡行」といった行事の多くが中止された。一方で、1,100年以上ともされる祭の歴史上初めての取り組みもなされた。1か月にわたる祭一連の行事の多くを中止するとともに、例えば神輿渡御に代わって、「御神馬」が練り歩く試みが実施された。例年には山鉦巡行が行われる時間に、八坂神社に神社の関係者や氏子さんたちや山鉦町の人たちに導かれて、装束と鞍を着けた白馬が現れた。この日、百人前後の観客が見守る中、御神馬と山鉦町の人たちが祇園通りを目指して神社を出発した。

例年であれば京都駅に始まり、祇園通りから山鉦が巡行する大きな通りのコースは、世界中から訪れる観客と祭の参加者たちでごった返す。例年とは大きく事情が異なる今年2020年は、同じ7月の京都とは思えないほど駅に行き交う人々も日常よりも少なく、祇園通りも山鉦町の通りも、人の数はまばらであった。しかし、今年も祇園祭は京都の人の生活に入り込んでいた。例えば、祇園通りや錦市場の各店舗入り口には、山鉦町の照明が入った祭への御奉納の札が張られていた。店舗や住宅地の家の軒先には、八坂神社や各山鉦町の厄除け粽が飾られていた。祇園通りのアーケード街には、祇園祭のお囃子が流れ、八坂神社の御紋が入った提灯が掲げられていた。夜になると少な

いながらも浴衣姿の人たちが歩く姿が見受けられた。

京都文化博物館では、山鉦が巡行しないのをよい機会に、じっくりと山鉦の美を鑑賞できる「京都祇園祭一祭を支える人々と山鉦の美」という展示を開催した。動いている山鉦では見られない細部の実際の観察ができるまたとない展示になっていた。地元の人にとっても、街と祇園祭の再確認と新たな発見ができる時間であったに違いない。検温を済ませた地元の来場者の一人からは「山鉦のこんなところまでは、知らなかったわ。」という声も聞かれた。近くのデパートでは、食を中心にした祇園祭イベントが開かれていた。この時期、京都の人々は暑さに負けないように「力のある旬の『はも』」料理を食す。この『はも』や、祇園祭限定パッケージの「八つ橋」などのスイーツを目玉に、訪れる人々に日常とともにある京都の祇園祭をアピールしていた。京都駅でも、いくつかの売店などで祇園祭コーナーが設けられ、客がお目当ての商品を手取る風景がみられた。宿泊施設では、京都祇園祭のいくつかの行事が中止されたことを受けて、宿泊料金を値下げするというサービスを提供するところもあった。

世界的に見てもかつてない感染症の大流行という事態に、1100年以上続いてきた<sup>43</sup>といわれる京都祇園祭もまた新たな試みや大幅な変更を加えて、感染拡大に細心の注意を払う形で実施された

以下、八坂神社で今年2020年度実施されたご神事、行事の実施と中止・変更の一覧を記す。

[中止]

- ・7日：綾傘鉦稚児行列
- ・10日：お迎提灯
- ・13日：長刀鉦稚児行列
- ・13日：久世稚児社参
- ・24日：山鉦巡行（後祭）
- ・24日：花傘巡行

[変更]

- ・1日：長刀鉦町御千度一稚児の参拝は中止して実施
- ・10日：神輿洗奉告祭一宮本組のみ参列
- ・17日：前の祇園祭（大祭）一神幸祭に代わって

実施

- ・24日：後の祇園祭（大祭）一還幸祭に代わって実施
- ・28日：神輿洗奉告祭—官本組のみ参列
- ・31日：疫神社夏越祭—「茅の輪」を1日から設置

[実施]

- ・10日：神用水清祓式
- ・10日：神輿洗式
- ・13～24日：御旅所授与所
- ・15日：生間流式包丁奉納式
- ・15日：宵宮
- ・16日：献茶祭
- ・17日：御神霊渡御祭
- ・23日：煎茶献茶祭
- ・23日：オハケ清祓式
- ・24日：御神霊渡御祭
- ・24日：又旅社奉饌祭
- ・28日：神用水清祓式
- ・28日：神輿洗式

このような新しい試みや変更は、祭の長い歴史の中では何度か見られた。例えば、応仁元年（1467年）に始まる応仁の乱では33年にわたる中断があった<sup>44</sup>。しかしながら、明応9年（1500年）に祭礼が復活<sup>45</sup>して以降は、祭は変遷を加えつつ継承され、今や世界的な人類共通の資源<sup>46</sup>となった。その他にも、江戸時代には京都市中で何度も火災が起こり、その度に町の人々はその損失をばねに華やかな山鉦を出現させてきた<sup>47</sup>。幕末の元治元年（1864年）には「蛤御門の変」によって市中が大火にあった。その時にも山鉦の多くが焼失したが、この消失がそれまでと大きく異なっていたのは、その後の政変で政治経済や文化を担う人材の多くが京都を去ってしまったことである。復興は困難を極めるものの、町の人々は竹内栖鳳、今尾景年といった新しい時代に京都で活躍する芸術家たちとともに少しずつ山鉦を復興させていった<sup>48</sup>。明治維新後は、最も大きな変更がなされた。祇園祭を支える神輿轅町などの制度が廃止され、府の認可する清々講社が発足した。祭の日程も太陽暦

に沿って変わった<sup>49</sup>。第二次大戦中の昭和18年（1943年）から4年間は山鉦建、神輿渡御も中止された。その後昭和22年（1947年）には京都市観光局が祇園祭復活をGHQに了承されている<sup>50</sup>。また明治時代には、祭の開催時期にコレラの流行が何度か見られた。その影響で、延期や前倒しでの実施を余儀なくされたりしてきた歴史がある。危機を乗り越えるだけではなく、時代に合わせた変更もなされてきた。平成8年（1996年）には、函谷鉦保存会が、女人禁制を解いて囃子方に女性の参加を許可した<sup>51</sup>。その変遷は祭の継承の歴史でもあった。

京都祇園祭は、成立当初の目的を超えて京都、そして日本をはじめ世界中の人々が共有できる文化としての都市祭礼の一つだといえる。疫病退散をその大きな目標に始まった祇園祭であるが、2009年にはユネスコ無形文化遺産にも登録された世界の共通文化資源でもある。日本の歴史では、はしかをはじめ、感染症や伝染病が幾度も流行してきた<sup>52</sup>。しかし、今回の新型コロナウイルスによる感染症の世界的な流行は、今や日本国内はもとより、全世界から訪れる大勢の祇園祭観客をも足止めしてしまうという事態になった。感染症の流行を受けた今回の対応は、京都をはじめこの祭を求めてやまない人々にとっても、新たな模索の中で祭の意義を問い直す機会にもなったのである。

#### 4.2 田島祇園祭における対応

福島県の南会津町では、毎年7月22日から24日にかけて田島祇園祭という大規模な夏祭が開催される。この祭は牛頭天王須佐之男命と土地の神である田出宇賀大明神<sup>53</sup>を祀る田出宇賀神社と、主に地元の人々による「お党屋制度」との協力で実施されてきた祭である。鎌倉時代より800年以上続いてきたといわれる古い祭であるが、その長い歴史においてはこれまでも、領主の転出や第二次世界大戦などにより、何度か中止されたことがわかっている<sup>54</sup>。この祇園祭は、鎌倉時代の領主が、自分たちの氏神である牛頭天王須佐之男命をこの地に勧請して始まった祭とされる。そのために、祇園祭の名を冠してはいるが、元来は

京都祇園祭のように蔓延する疫病を引き起こす怨霊を鎮める目的で始まったものではなかった。この地方では、都市部のように疫病が大流行することもなかったが、継承の長い歴史のうちには、社会情勢を受けて幾度か中断の危機に見舞われてきたのであった。

2020年度の田島祇園祭行事は、1月15日の「御党屋御千度」<sup>55</sup>、「大盃廻し」<sup>56</sup>から始まった。「御党屋御千度」はこれらの行事をはじめとして、1年間にかけて祭の準備がなされるが、2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大がこの祭の準備と開催とに大きな影響を及ぼした。それは、祭を支える人々や共同体にとっても大きな打撃と試練になった。また新たな祭のあり方を見直し、困難を乗り越える契機ともなった。

1月15日前後の時期は、いまだ日本においては新型コロナウイルスの感染の流行が認められなかった時期である。南会津町では例年の祭礼格式に則り、かつ本年度当番お党屋組の持ち味を生かした祭にするために、前々日から当番お党屋本とお党屋組の人たちが集結し準備が進められた。例年にない積雪の少なさから、安全対策など多少の注意事項はあがったものの、15日当日は多くの人たちが集まって、当番お党屋組らしさとともに、本年度の観客や参加者とともに作る祭ならではの「御党屋御千度」、「大盃廻し」が行なわれた。

そして2月に入ると第1例を皮切りに、日本国内でも新型コロナウイルスの感染拡大がみられはじめた。そして世界中がパンデミックに覆われる事態を迎えることになった。田島祇園祭では、田出宇賀神社の宮司をはじめとして当番お党屋本、お党屋組の人たちと行政関係者など関係者が会合を開き、そこで祭開催の方向性について話し合われた。そして4月初めには、宮司の最終的な判断で「七行器行列」や「神輿渡御」、「屋台運行」などの人々が集まる行事は一切中止し、いくつかの御神事をごく少数の関係者のみで実施することに決定した。感染の流行を見守っていた各地の祇園祭や夏祭の主催者たちは、この後の経緯で続々と規模の縮小や中止を決めていく。田島祇園祭の早期の決定は、この田島祇園祭は町の規模に対して、

非常に大きな祭であること、東日本大震災からの復興の経験、それから歴史的にも祭が開催の危機に見舞われたことは何度もあるが、その度に危機を乗り越えて祭が続けられてきたこと、などを考慮に入れたものであった。宮司は「(規模縮小は)非常に苦渋の決断だった」<sup>57</sup>といい、一番心配されるのは、行事の練習すら行なえない状況であることから、この祭と街を担っていく若者や子供たちへの「祭の継承を途切れさせてしまうのではないか」<sup>58</sup>ということであった。また当番お党屋本も「(規模縮小は)断腸の思いで決断した。従来通りの祭ができるように感染症流行の終息を願いつつ、来年の当番お党屋組の党本に引き継ぎたい」<sup>59</sup>と話し、筆者に対しても落胆を隠しきれない様子で「こんな年もないけれども…それも祭だ」と述べた。

7月22日から24日は、町の中に1年に1度開かれる祭に集まる例年の観客の姿はなく、ひっそりとした光景であった。しかしながら祭を支えてきた人々の思いは、いたるところで見受けられた。例えば、屋台運行は中止となったが、屋台の収納庫は開放しており、例年よりずっと少ない観光客の目を引いていた。普段とあまり変わらないひっそりとした神社の境内では、粛々とご神事が進められ、流されたお囃子が雰囲気盛り上げた。いくつかの家の軒先では祭の提灯が吊るされていた。3月初め、いまだ3密回避の制限がなされていない時期には、お党屋組の人たちが休みの合間を縫って縁起物の「ほろ花」を手作りした。例年であればこのほろ花は神輿渡御で観客や町の人たちに配布され、奪い合いにもなるものである。しかし今年はお党屋本の配慮から自宅の縁側に置かれ、花に気づいた人々が自由に持ち帰れるように設置された。ほろ花を持ち帰る人たちはいつしか、自発的にお賽銭を置いていくようになった、と当番お党屋の党本が語っていた。このお賽銭は後に神社に奉納された。

当番お党屋組の党本が口々に語っていたことだが、祭はみんなで作り、祭を作る人たち自身が真っ先に楽しむような、一年に一度の大きな行事である。町の人たちをはじめ、祭をきっかけにお党



屋組などに参加してきた日本各地の人たちは、一年をかけて祭の準備をし、祭の開催を楽しみにしている。今年の規模縮小という判断は、宮司と党本らを中心に苦渋の中の決断であった。祭を作る人たちは来年の開催に向けて、気持ちを切り替えて動き始めている。田出宇賀神社宮司は、聴き取りで「いつの時代も、何かしらの出来事や中断の危機にはあってきた。それを乗り越え、あるいはそれらとともに祭がある。来年はいい祭にする。田島っ子がいる限り、この祭は無くせない。」と語った。たとえ一時期、祭に人が集まることができなくても、密集による感染の拡大をお互いに防ぐことが最優先事項であった。そのような思いやりと結びつきこそが、祭で培われるつながりや絆の真の価値と意義に通じているのだろう。

田島祇園祭は、もともと都市に蔓延する疫病除けを起源に始められたものではなく、祭の形式を京都の祇園祭から受け継いで始められたものであった。牛頭天王須佐之男命を祭神とし、夏の疫病退散を祭の目的の一つにしていることに変わりはないが、疫病の蔓延という観点からすると、都市部の人々の不安や施政者の責任という意味では切実感が違ってくる。しかしながら現代に息づく田島祇園祭では、大都市である京都の祇園祭と同様の感染症流行への対応が求められることになった。かつて疫病の流行を収めるために始められた祭は、新型コロナウイルスの感染拡大に際して、感染を拡大させるリスクを反対に有することになった。田島祇園祭の主催者たちは密集を避け、感染のリスクから人々や社会を守ろうという思いから、早い段階で規模縮小での実施という決断に至ったのであった。小西賢吾は、頭ではなく祭の中で身体性をリアルに伴うことで、人々が一つになり、祭を通じた互いへの信頼や絆が生まれる<sup>60</sup>としている。それは第2節で述べたように、大森がいう祭の中の信仰を超えたところにある「信頼」である。そのような身体性を通じたつながりや絆の強化は、今回の祭の開催では断念あるいは、縮小という制約を受けるものになった。しかし、そのような制限の中にあるからこそ、維持補強されるつながりのあり方もあるといえよう。

規模縮小での開催の仕方は、祭に対する人々の熱意の表れであるとともに、祭を通してつながる人々に対する健康と、人々や社会の間の絆の強化への願いを込めた苦渋の決断に支えられているものと捉えることができる。

## 5. 祭の意義再考

現代社会は一見すると、便利でものにあふれた豊かな時代である。そのような都市的な文化は今や地方と都市部で著しい違いはなくなった。地球規模での物理的な距離すら、インターネットの普及で軽々と越えられるようになった。しかし、近代化以前であればハレにしか映らない日常に住む現代の都市民も、「ハレの日」である祭を求めている。小松和彦は、松平誠の「現代で一番困るのは（略）実はハレの場が多すぎること」という論考を記し、ハレ化が浸透した日本社会で、決して人々が非日常である「祭」にかつてのような意義を見出さないのではないのだとしている<sup>61</sup>。それどころかむしろ、そのような画一化したハレだらけの日常に囲まれて、様々な社会問題が登場してくるにつけ、人々は祭を求めてやまない、と小松は述べている<sup>62</sup>。そして小松は、もはや「商品化」、画一化してしまっただけのハレが、どれだけ人の心を満足できるのか、そこに神と信仰に結び付いたハレとしての祭を現代の人々が求めている、と論じている<sup>63</sup>。

疫病の蔓延はもはや怨霊の祟りでは解決しない。しかし、祭とそれにまつわる人々の信仰は、現代の都市民が祭を求めてやまないことにも見て取れるように、決して薄れているのではない。むしろ、今回の新型コロナウイルスという未知の脅威に対峙するにあたっては、(特定の宗派ということによらず) 神仏や目には見えない大きな力に祈りを捧げるといふ人々の信仰心が見直されることになったのではないだろうか。なぜならば、小松が「神のある」<sup>64</sup>祭（イベント）を現代社会の都市に住む人々が求めている、というように、過密を避けつつも「御神事」は執り行われた祭が多かったからである。また今回の感染拡大防止に向けた祭の規模縮小での実施と同時に、多くの神社仏閣で感

染拡大の終息祈願が見受けられた。感染症の流行という目には見えない脅威に対し、かつての人々が祭をもって疫病退散を祈願したように、神仏へ感染拡大の終息を願う姿が消失してはいないと思われる。反乱による中断や自然災害からの復興という事態に対しては、祭を変わず実施すること、あるいはより盛んに開催できることが人々の大きな目標とされた<sup>65</sup>。今回の感染症の流行の場合、過密を避けるという目的が最優先され、実施はするが人は集めない、という選択に至った。祭の実施は、文化としての祭を絶やさないという意味とそして感染症の流行を終息させるという人々の願いを込めた双方の意味があったといえる。また規模縮小という方法は、先述した田島祇園祭の事例でみると、この祭を支えてきた人たちにとっては、祭を通した人々のつながりを再確認し、制約の中で絆を新たに強化するという意義もあったといえよう。

今回、過密を避けるために、身体的な接触を多く伴い、またそのことが祭ならではの人と人の信頼を醸成するという意味を持つ一連の行事は、大幅に中止せざるを得なかった。それでも、祭を通した人々や共同体社会の間のつながりは弱まることはなく、反対に心を一つにして立ち向かうという祭の結束は、行事ではなく互いを思いやりつつ柔軟な感染症への対応、という新たな目標に向かって発揮された。同じ場所には集まることができない、身体性を伴う激しい接触もかなわない。しかし、今年の祭をいかにして実施するかを考え危機や悩みを共有することもまた、祭を通した人々のつながりといえる。そしてそのつながりと絆は、来年以降の祭に引き継がれていく。来年度の祭には、聴き取りでも浮かんでいる人々の祭への思いと、危機に際してより一層の強さを培ったつながり方が反映されるだろう。

## 6. 結語

感染症の流行という事態は、日本の歴史では少ないことではなく、このような社会情勢で文化もまた大きな役割を果たしてきた。そもそも祇園祭もまた、都市で疫病が流行したことから始められ

た夏祭である。

祭の存続に関しては、戦乱や社会情勢で存続が危ぶまれその度に乗り越えてきた事例や、中断を余儀なくされても再興してきた事例は枚挙にいとまがない。今回の感染症の流行に対しては、存続の危機というよりも、開催の仕方に大きな制約と変更が課されたケースといえるだろう。その大きな制約の中で、長い歴史を持つ祭を何とか継承させようとしたことについては計り知れない価値が見いだせるだろう。怨霊と疫神を鎮めるための祇園祭は、医学的な対処方法の下で、祭を通した人々のつながりの維持と神への祈願という思いを込めて実施されることになった。加えて、中止や制約の中で、改めて確認された祭に対する人々の祈りと思いや、祭を通したつながりと絆があった。祭の規模縮小や中止は、社会的な危機から余儀なくされた側面もあるが、一方で自分たちが祭や祭を通してつながる人々のために、感染拡大防止のため能動的に制限するという対応に向かったといえるのではないだろうか。

現代は公衆衛生と医療が格段に発達し、かつて祇園祭が成立した当初のように疫病の流行を怨霊や疫病の祟りに求めることはなくなった。ところが今回みられる感染症の世界的な大流行は、未知なる脅威への科学的な対処をより新たに要請するものになった。病や災害に対しては、これほど科学や医療が発達した時代にも、必ず限界がある。それは人々が今でも神仏に健康や安全を祈願してやまないことが証明している。酒井シズは近代医学が宗教から医学を分離しても、人々が神仏に祈ってやまないのは、からだは自然の中に生きること、自然の威力に逆らう恐ろしさを覚えているからだ<sup>66</sup>といっている。また、島田裕巳は、疫病と人間の歴史を見ているといかに日本人の祖先たちが厄災の軽減を願って、神仏に祈ってきたかがよくわかる<sup>67</sup>とも述べている。祭は、それぞれの効能を持つとされる神々への日本人の信仰心の表れでもある。日本人は古来より、祭を通して多様なたくさんの神々に健康や安全などを祈願し、感謝と奉納を捧げ暮らしてきたのであった。

柳川啓一が述べているように祭は毎年、祭の準

備や行事の実施を通して人々や共同体の間のつながりをよみがえらせる<sup>68</sup>。柳川の言うように、現代社会では祭が必ずしも共同体社会への帰属感をもちたらしめるものとはいえない。しかし、現代には現代ならではの、都市部には都市部ならではの祭の求め方、祭を通したつながり方がある。その大きな要因には、日本人が古来より変えずに受け継いできた祭を通した神や自然への信仰の心と、祭を通して培われる人々間の信頼感や絆の醸成という点が挙げられるだろう。医学や医療が発達すればするほど、人々の心は祭や信仰を求めていくのではないだろうか。なぜならそれは、古い時代には、世界中でもともと宗教と医学が切り離されてはいなかったこと、この2つは現代でも相互補完的な役割を担っているからだといえるだろう。

未知なる新型ウイルスに起因する感染症の爆発的流行という脅威は現代社会の人々を不安に陥れているが、感染症自体は、実は自然の猛威の一つなのである。人類は科学や文明を発達させることで、これまでも長い歴史において自然の驚異に立ち向かい、あるいは共に生存する道を模索してきたのであった。日本においては、感染拡大の防止策として大規模な制限を課す生活様式が求められている。感染を拡大させるリスクを持つ祭の多くは、規模縮小や中止を余儀なくされた。しかし、その対応の中に心をつなげて立ち向かうという、祭を通して培われたつながりが発揮もされたのであった。それは、祭を開催するために1年がかりで準備をしてきた、あるいは何代にも渡って継承への熱意を持続させてきた人々が、開催の危機にあっても祭を途絶えさせないために、実施方法を変更するかどうか、互いの安全を思いやる柔軟な対処法を模索する人々の姿にみとることができた。祭は一人ではできないものである。祭はまた、地域を超え世代を超えて、多様な人々の間に開かれ<sup>69</sup>、新たなつながりを育む。日常にみられる危機状況下にこそ、多様な人々の間に開かれた祭と、祭を通したつながりと絆の真価が問われている。今後続いていく祭と人々の関わり方に、その成果が現れてくるといえよう。

感染症の脅威から人々を守るためにとられた各

祭の対応には、祭に集約されてきた人々の祈りと願いを受け継ぎ、文化や経済、社会的な資本としての祭を支えてきた足跡が反映されていた。そこにはまた、祭とともに生きてきた人たちのつながりに裏付けられた、新しい信頼と絆への模索がうかがわれた。

註：

- <sup>1</sup> 脇田晴子『中世京都と祇園祭—疫病と都市の生活』、吉川弘文館、2016年、11p.
- <sup>2</sup> 山田浩之「新しい共同体を構築する場としての祭り—祇園祭に見る祭縁の実態」山田浩之編著『都市祭礼文化の継承と変容を考える』、ミネルヴァ書房、2016年、46p.
- <sup>3</sup> 橋本章「祇園祭の山鉦と信仰」京都文化博物館編『京都祇園祭—町衆の情熱・山鉦の風流』、思文閣出版、2020年、196p.
- <sup>4</sup> 山田浩之、前掲書、48p.
- <sup>5</sup> 脇田晴子、前掲書、11p.
- <sup>6</sup> 脇田晴子、同上、11p.
- <sup>7</sup> 山田浩之、同上、48p.
- <sup>8</sup> 脇田晴子、同上、14p.
- <sup>9</sup> 脇田晴子、同上、73p.
- <sup>10</sup> 脇田晴子、同上、107p.
- <sup>11</sup> 脇田晴子、同上、15p.
- <sup>12</sup> 山田浩之、同上、50p.
- <sup>13</sup> 山田浩之、同上、50p.
- <sup>14</sup> 山田浩之、同上、50-51p.
- <sup>15</sup> 河内将芳『室町時代の祇園祭』、法蔵館、2020年、241p.
- <sup>16</sup> 本郷和人、井沢元彦『疫病の日本史』、宝島社新書、2020年、31p.
- <sup>17</sup> 波平恵美子『ケガレ』講談社学術文庫、307p.（初出：東京堂出版、1985年）
- <sup>18</sup> 波平恵美子、前掲書、309p.
- <sup>19</sup> 本郷和人、井沢元彦、前掲書、89p.
- <sup>20</sup> 大森重宣「祭に浮かび上がる民族性と地域性」山田孝子、小西賢吾編著『祭から読み解く世界』、英明企画編集、2018年、77p.
- <sup>21</sup> 大森重宣、前掲書、78p.
- <sup>22</sup> 島田裕巳『疫病 VS. 神』中央公論新社、2020年、7p.
- <sup>23</sup> 島田裕巳、前掲書、220p.
- <sup>24</sup> 山田孝子「祭に浮かび上がる民族性と地域性」山田孝子、小西賢吾、前掲書、78p.
- <sup>25</sup> 山田孝子、同上、80p.
- <sup>26</sup> 本郷和人、井沢元彦、同上、183p.
- <sup>27</sup> 松下彰信「祭の原点と意義」香川大学教育学部篇『香川大学研究報告第1部134号』、香川大学教育学部、2010年、66p.
- <sup>28</sup> 田中宣一『祀りを乞う神々』、吉川弘文館、2005年、3-4p.
- <sup>29</sup> 柳田國男「日本の祭」『定本柳田國男集第10巻』、筑摩書房、219p.（初出：弘文堂書房、1942年）
- <sup>30</sup> 柳田國男、前掲書、182p.
- <sup>31</sup> 桜井徳太郎『祭と信仰』講談社学術文庫、1987年、66p.（初出：「古四王神社の特殊神事と信仰伝承」『社会と伝承』、

1960年)

32 小松和彦「神なき時代の祝祭空間」小松和彦編『祭とイベント』, 小学館, 1997年, 38p.

33 柳川啓一「祭の神学と祭の科学」『祭と儀礼の宗教学』, 筑摩書房, 1987年, 104p. (初出: 岩波書店『思想』, 1971年)

34 リーチ, エドモンド「時間とつけ鼻」青木保、井上兼行訳『人類学再考』, 思索社, 1974年所収

35 ターナー, ヴィクター、富倉光雄訳『儀礼の過程』, 思索社, 1976年, 128p. (初出: The Ritual Process—Structure and Anti-structure』, 1969)

36 神崎宣武「ハレとケの循環が社会を安定させる」(株) 商工中金経済研究所『商工ジャーナル第429号』, 2010年

37 松下彰信, 前掲書, 68p.

38 厚生労働省ホームページ

「新型コロナウイルスに関連した肺炎の患者の発生について(1例目)」(2020年1月16日)

[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_08906.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_08906.html) 2020.9.12 閲覧

39 厚生労働省ホームページ

「新型コロナウイルスの感染症について」「国内の発生状況」(令和2年9月11日版)

<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunaihasseijyoukoyu.html#h2> 2020.9.12 閲覧

40 外務省海外安全ホームページ

「各国地域における新型コロナウイルスの感染状況」

<https://www.anzen.mofa.go.jp/covid19/country-count.html> 2020.9.12 閲覧

41 World Health Organization

「WHO Coronavirus Disease(COVID-19)Dashboard」

<https://covid19.who.int/> 2020.9.12 閲覧

42 厚生労働省ホームページ

「新型コロナウイルスに関する Q&A」

「問2 新型コロナウイルス感染防止を日常生活に取り入れた「新しい生活様式」とは何ですか」

<https://www.mhlw.go.jp/stf/seikatsunitsuite/bunya/kenkou-iryuu/dengue-fever-qa-00001.html#Q1-2>.

2020.9.12 閲覧

43 吉川忠男「神輿渡御の曳き手とその心意気」監修京都市文化市民局、文化財保護課『祇園祭温故知新』, 淡交社, 2020年, 162p.

44 河内将芳, 前掲書, 231p.

45 橋本章, 前掲書, 198p.

46 佐野真由子「人類の無形文化遺産になった祇園祭」シーダー編集委員会『シーダー・No.7』, 昭和堂, 2017年, 16p.

47 京都文化博物館『京都祇園祭—町衆の情熱・山鉦の風流』, 思文閣出版, 2020年, 124p.

48 京都文化博物館, 同上, 124p.

49 京都文化博物館, 同上, 173p.

50 京都文化博物館, 同上, 172p.

51 京都文化博物館, 同上, 176p.

52 石弘之『感染症の世界史』, 角川文庫, 2020年, 276p. (初出: 洋泉社, 2014年)

53 「田出宇賀大明神」とは、在来の

「宇迦御霊」(ウカノミタマ)を祀る村氏神といわれる。

(田島町史編纂委員会『田島町史第4巻民俗編』参照)

54 田島町史編纂委員会『田島町史第4巻民俗編』, 歴史春秋

社, 251-268p.

55 「御党屋御千度」はその年の当番お党屋組から各戸男性一人が紋付き羽織、股引、白足袋、わらじ履き姿で着物の裾を膝より上に端折り、神社に赴いて「お千度参り」を行ない、その年の祭礼の無事と安全を祈願する行事。実際には千回お参りすることはないが、宮司が許可する太鼓の音が鳴るまで、お参りと手水でのお清めが続けられる。(室井博「会津田島祇園祭—お党屋制度について—」田中義広編『まつり30号 特集頭屋』, まつり同好会, 1977年, 66p.参照)

56 「大盃廻し」は、「御党屋御千度」終了後に、神社社務所にて行われる直会において、御神酒約5合入りの「大盃」を、御党屋御千度参加者が順番に廻して飲み干す行事。(室井博, 前掲書, 66p.参照) 例年、大量の日本酒のために急性アルコール中毒に陥ってしまう者が出るほどである。組の人によると、今年は大盃の大きさを小さいものに変えたとのことであった。

57 南会津町田出宇賀神社宮司の談話

58 南会津町田出宇賀神社宮司の談話

59 福島民報「2020年8月21日」号・掲載記事

60 小西賢吾「祭に浮かび上がる民族性と地域性」山田孝子、小西賢吾, 前掲書, 77-78p.

61 小松和彦, 前掲書, 16p.

62 小松和彦, 同上, 37-38p.

63 小松和彦, 同上, 37-38p.

64 小松和彦, 同上, 37p.

65 東日本大震災の2011年には、田島祇園祭においては祭を変わらぬ形で実施することが復興への力につながると考えた、と田出宇賀神社宮司が話している。また東日本大震災時には、東北をはじめとする近隣の県内で行われる祭にも大きな被害の影響があったが、岩手県の大杉神社宮司、佐藤明徳は「祭の復活が復興の証となる」と論じている。(佐藤昭徳「十年かかっても必ず元の姿に戻す—祭の復活が復興の証—」, 神社新報社, 『東日本大震災 神社・祭り—被災の記録と復興—本編』, 神社新報社, 2016年, 32p.参照)

66 酒井シズ『病が語る日本史』講談社学術文庫, 2008年, 328p. (初出: 講談社, 2002年)

67 島田裕巳, 前掲書, 222p.

68 柳川啓一, 前掲書, 104p.

69 小西賢吾, 前掲書, 139p.

(Received:October 16,2020)

(Issued in internet Edition:November 1,2020)